散りゆく

葉仙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
散りゆく

【Ｎコード】
Ｎ５９５８Ｎ

【作者名】
葉仙

【あらすじ】
日野莉麻１６歳。突然魔法陣に吸い込まれ、ファンタジーな世界へトリップ。その世界では私は神とも呼ばれる天才？どういうこと？早く帰してよ！――――そんな莉麻の異世界奮闘記。※主人公チートです。ご注意下さい。

1　序章

午後１１時過ぎ。
私はいつも通り眠りにつこうとしていた。

けれど。

突然私の足元に複雑な魔法陣が出現し、煌き始めた。

「…え？」

何これ。
魔法陣だよね？
どうして急に私の足元に…。

と悠長に考えていると。

「ってわあああ、ちょっと待って！」

魔法陣がより一層輝き始め、光が私を包み込む。

嘘っ…私どうなるの！？
明日小テストなんだけど！
あ…サボれるなら良いかな…って良くない良くない！！
早くこの陣から出なきゃ！

と思っていた矢先のことだった。

魔法陣の中へ吸い込まれ、世界が反転する。
そして魔法陣はどんどん縮小して行く。

――――閉じるっ！？

「ひゃあああああぁぁぁっ…！！」

日野莉麻（ヒノリマ）１６歳。
よくわからない魔法陣に吸い込まれてしまいました。

1　序章（後書き）

初異世界もの！
頑張ります（、・ω・、）

2　意味不明

「…何ここー…」

私は今どこにいるの？

よくわからない魔法陣に吸い込まれて、現在よくわからない街の路地裏にいる。

ここ日本？

あ、アメリカとかだったりしないよね？

あー、うーっ…！

こんなことばっかり考えてると不安が一気に込み上げてくる…。

どうしよう、どうしよう？

「誰か教えてよーっ！」

莉麻は心の底から小声で叫んだ。

＊＊＊＊＊

「侵入者？」

彼は長い青髪を揺らめかせ、報告してきた兵士を見やる。

その目線はとても鋭い。
ただの兵士だったら即、竦み上がる。
報告してきた兵士もまた然り。
青ざめながら口を開く。

「は、はぃ…。聖騎士アルベール様が、仰られておりました」
「至急アルベールを呼べ。話を聞く」
「はっ！」

――――誰だ？このジュレイトに侵入する愚か者は。

彼は神官イクレア・アグリット。
歴代でもトップクラスの力を持つ彼は、すでに侵入者を抹殺する計画を練っていた。

「ただでさえ忙しいというのに…」

ぶつぶつと小言を言っていると、がちゃりと執務室の扉が開いた。

「やぁイクレア、お呼びかな？」
「アルベール。ふざけていないで――――」

イクレアが苛立ちを隠さず諌めようとすると、アルベールはすっと表情を変えた。

「わかってるよ。侵入者のことだろう？」

「…そうだ」
「侵入が確認されたのは１０分ほど前。どうやらラゼラルにいるようだ」
「ラゼラル、だと？」

ジュレイトの首都、ラゼラル。
今彼らがいるジュレイト城からさほど離れていない。

ならば。

「俺が直々に、捕縛しに行ってやろう」

それを聞いたアルベールはハア、とため息を吐いた。

「変わらないねイクレア。君はその侵入者を捕縛してどうするのかな？」
「殺す」
「……だ、ろうねえ」

そう言うと思った、と聖騎士は呆れたようにソファへ沈み込む。

イクレアは自分や国の害となるものは徹底的に排除する。
女子供でもそれは変わらない。
「冷酷な神官」というレッテルが貼られるのも当然のことだった。

「けど、ちょっと聞いてくれないかなイクレア」

まだこの神官に伝えていないことがある。
それは、彼のプライドを傷つけるものかもしれないが。
伝えねばならないだろう。

「何だ」
「その侵入者は君と同等、もしくはそれ以上の魔力を持っている」
「…！」

イクレアが眉を潜める。

ここ数年、己と同等の力を持つ者など一人もいなかった。

だが今。

己と渡り合えるような者がいる。

すぐ近くに。

にやり、とイクレアは口元を歪ませる。

「ますます会いたくなったな」

アルベールは心底から侵入者のことを哀れんだ。

＊＊＊＊＊＊

「う、ぅぅ…ふ、…」

莉麻は泣いていた。

もう何が何だかわからない。
全然知らない土地。
全然知らない人達。

ぎりぎり言葉は聞き取れるが、それでも不安は潰えない。

「怖い…よ、ふえ、おかーさあん…っおとーさあんっ」

ぼろぼろと涙を流し、両親を求める。

こんなときばかり、とても恋しい。

どうすれば、帰れるの？
どうすれば、良いの？

これは、夢じゃないの…！？

そんな考えばかり巡らせていた時。

ふっと莉麻に影がさした。

「…ッ！？」

見えたのは、青。
そして藍の双眸。

「侵入者だな」

しんにゅうしゃ？

私が…？

「俺と戦え」

…たたかう？

…私が？

2　意味不明（後書き）

イクレア…おま…

莉麻ちゃんぼろ泣き。

3　意味不明2

急に戦えって言われても、勿論全く意味不明なわけで。
当然のことだけど、私は余計混乱した。
でもそんな私のことは気にも留めず、青の青年は話し続ける。

「アルベールによると、お前は俺と同等…もしくはそれ以上の力を持っているそうだ」

ちから…？
何ソレ、握力とか…その辺じゃないのはわかるけど…。
まさか。
まさかそれって、もしかしなくても。

「力って」

地球ではありえないとされる――――

「魔力、ですか？」

私が問うと、青の青年は眉を顰めた。
そして口を開く。

「当たり前だろう。何だと思っていたんだお前は。
…よくわからない奴だな。侵入者のくせに気弱、無知…しかも泣い

ていただろう。
俺を前にしても抵抗もしない逃げもしない…どういうことだ」
「そんなこと言われても、…侵入者って言われても…ここがどこかも知らないのに」

あああ、また泣きたくなってくる。
ていうかその…あ…あうえーう？って人ふざけないで。
私は普通の女子高生だってのに。
普通にありふれてるけど幸せな生活を送ってたのに！
…駄目だ、我慢できない。
泣いちゃう。

「う…どこですかここぉ」
「は？」
「どこなんですか、家に帰りたいんです、うっく…」
「はあっ…！？」

青年は思いっ切り顔を歪めた。
でもここの人だって言うなら、ここがどこなのかも解るはず。
だったら訊いて、なんとか帰る方法を探さないと…！
…心ではこんなきっちりしてるけど、実際は泣きじゃくってます私。
一回泣くと止まらない方なんだもん…うう。

そして青年は一応、答えてくれた。

「…ここはジュレイト神国の中の都、ラゼラルだ。
そんなことも知らないのか」

「じゅれいと…？」

聞いたことがない国の名前だ。

…あれ…そういえば「魔力」とか言ってたよね。
それに神国なんて…日本、いや地球上ではない。
ってことは…

「異世界…？」

ああ、そうだ。
こういう小説、読んだことある。
私実体験しちゃってるんだ…。

自覚したらまた涙があふれてきた。
もうどうしたら良いんだろう。

誰か助けてよ…！

「…まさかお前、ジュレイトも知らないのか」

青年は信じられないと言う様に此方を見ていたが、私はただ泣くだけだった。

「おい、泣いてないで答えろ！さもなくば殺す、侵入者には変わりない」

…殺す。

その単語で、私の中で何かが弾けた。

――――大丈夫、俺が出るよ――――

低めの声が私の中で響く。

そして、体と意識が遮断され、ゆっくりと意識が遠のき始める。

「いい加減にしろ」

ぶわりと私の体が宙に浮く。
そしてその周りには幾つもの七色に輝く光の玉が浮いている。

「…何者だ」

青年は右手を前に構え、その手のひらから青い光の球体を出す。
いつでも攻撃に出れる様に。

「先刻までの意識はどこへ行った」
「俺はヒュウガ」

今私の体を占めている意識、「ヒュウガ」は低く答えた。
ひゅうが…どこかで、聞いたことがある…。
でも、どこでだっけ？

「ずっと前から、莉麻の中にいた。
ずっと莉麻に守られていた」
ヒュウガはぎろりと青年を睨む。

そして、私の意識も消えかける。

最後に聞こえた言葉は、

「だから今度は、俺が守る番だ」

優しくも強い、そんな言葉だった。

3　意味不明２（後書き）

うあお…ねむいです。

下手くそすぎて笑える…ｗ
あとで直すやもしれません。

お気に入り・評価ありがとうございます！
嬉しいですー＾＾

4　城内にて　私は今、

夢を、見ている。
幼い頃の、懐かしい思い出。
でもあの場所は、いったいどこだったんだろう。
不思議な色とりどりの花が咲き誇る、あの花園。
あそこは、本当に現実世界に存在していたのかな。

「りま！」

がさがさと花達を掻き分け、一人の男の子が近寄ってくる。
私は、その男の子を知っている…。

「りま、ここにいちゃ駄目だ。早く外に出るんだっ」

男の子はあせっていた。
どうしたというのだろうか…？
それに、外って？

まるでここが、とても危険な場所みたいに言う。

でも幼い私は、いやいやと首を振る。

「やだ。だってりまがいないと、———くん、きえちゃうって言っ

てたもん。
　きえちゃうの、やだもん。いっしょに出ようよ」
そしてぎゅっと男の子の手を握る。
男の子はとても困った顔をしていた。
俺だって離れたくない。ずっといっしょにいたい。
だけどここにいては莉麻が危ない。

「ねえ、いっしょにいこう？」

私はとうとう泣き出してしまった。

「やだよぉ…せっかくおともだちになったのに。
　もっといっしょにいたいよぉ。
　ねえ、ねえいっしょに出ようよっ…」
泣きじゃくる私を見て、男の子は決心する。
「…わかった。いっしょに出るよ」
けど、と男の子は続ける。
「俺はきっと、りまと会って話すことはできなくなる。
　でも、信じて。
　俺はずぅっと、りまの中にいる。ずぅっといっしょだから」
「りまの、なか」

「そうだよ」

幼い私は全く意味をわかっていなかったけれど。
でも、いっしょに出るという言葉を聞いて安心する。

「わかった！じゃあ、外いこうよ」

私は男の子の手を握り、走り出す。
男の子はそっと握り返し、「こっちだよ」と道を指し示す。

ざぁ、と花弁が乱舞する。

前が見えなくなって、男の子の姿も見えなくなりつつある。

その中で、男の子は言葉を紡いだ。

「…俺は外へいったら…今持っているこの力を失ってしまう。
実体を保てなくなる。
りまを守れなくなってしまうんだよ。
それでも、良いの？」
「うん」

幼い私は即答し、更に続けた。

「りまが守ってあげる。
りまのなかで、ずーっと守ってあげる。

だから、いっしょにいようよ」

男の子はその言葉を聞いて、ふっと微笑んだ。

「そ、か。
わかった…外へ、出るよ」

ぶわり、と体が浮く感覚。

そして、2人は光に包まれて――――

ゆっくりと瞼を開けると、見慣れない真っ白で豪華な天井が飛び込んできた。

…あれ、私、どうしたんだっけ…？
ここどこ？

そしてだんだんと意識を失うまでの経緯を思い出す。

「そうだ…異世界にトリップして、青い人に殺されそうになって…それで…」

それで、どうなった？

「あー…頭痛い…ここどこ…都じゃないの…」

ずきずきと鈍い痛みが思考を遮る。
何だか目を開けているのも億劫だ。
閉じてしまおう。

と、今にも二度寝しようとした瞬間。

バアンッ！！

凄い勢いで扉が開いた。
思わずびくっと体が震える。

「わ、え、何…？」

慌てて枕から頭を上げ、音のした方を見る。
するとそこには。

「あ…青の人」

不機嫌そうなカオをした青の人が立っていた。
青の人はすたすたと私の元へ歩んでくる。

（な、なに？まさか殺される？）

と構えていると。

「具合はどうだ」
「へ…？」

ぐあい。
具合。
体調…。

「えっと、頭が痛いだけであとは何も」

急にどうしたんだろう、と考えていると青の人はベッドのすぐ近くにあった椅子に腰掛ける。

「…そうか」
「はい」

ふうと息を吐いた青の人は、すっと私を見つめた。
「倒れる…というより、意識を失う前のことは覚えているか」
さっき、自分でも同じことを考えていた。
異世界にきてしまったこと、殺されかけたこと。
意識を失う前のことなら、覚えている。
「覚えてます」
「…ならば、ヒュウガという男は知っているか？」
「ヒュウガ…」

――――大丈夫。俺が出るよ――――

――――今度は俺が守る番だ――――

あの、声。

「覚えてます…でも、その時のことははっきりとは…。
それに、その後のことは全くわからないです」
私がそういうと、青の人ははあ、とため息を吐いた。
呆れているような、少し安心したような。

そんなため息だった。
そして青の人はゆっくりと口を開いた。

「あの後…俺はヒュウガと戦った」
「えっ…」
「強かった。…あれは、人間が持っていて良い力じゃない」
青の人はぎゅっと眉根を寄せた。
人間が持っていて良い力では、ない…。
じゃあ私は…私の中に居るはずの、ヒュウガはいったい何だというのだろう。
青の人は更に続ける。
「本来ならあそこで我が命と引き換えても、お前を殺す気だった。だが、駆けつけたアルベールが攻撃しては駄目だ、と割って入ってきた。そしてヒュウガの意識は消え、お前の意識が戻ってきて…お前はすぐ気を失った」

いろんなことで頭がぐちゃぐちゃになって、頭痛が酷くなっていた。
私が混乱してどうしようと思ったとき、扉が開いた。
「や、イクレア。そして可愛いお嬢さん♪」
「軽口は良い。何しに来たアルベール」
「うっかり君が神持ち子を殺してしまわないように見張りに」
「…ふん、国の脅威ではないとわかった今、そんなことはしない」

かみもちご？って何だろう。
ついでに青の人の名前も、あまり良く聞き取れなかった。

「あの、青の人の名前は…？」
「青の人…？ああ、俺か。一応名乗っておく、イクレア・アグリットだ」

…む？

「い、いきゅ…」
「イクレア」
「いくーあ」
「…イクレア」
「いきゅりぇあ」
「……」

は、発音難しい。
上手く呼べない…どうしよう。

ぷっと金髪の男性が噴き出した。

「いきゅりぇあ、だってさ。可愛いねえ。
僕はアルベール。…呼んでごらん？」
「え、と」

「あうえーう」
「っ…」

今度はいきゅ…りぇあ？が軽くだが噴き出した。
あれ、私そんなに舌ったらずだったけ…？
まともに名前も呼べないなんて。

「あうえーうか。良いじゃないか、これからそう呼んでやろう」
「やめてくれ…うーん、じゃあアル、は？」
「アル」

これは何とか言える。
あー…高校生になって恥ずかしいなあ…。

「うん、じゃあアルで良いよ。よろしくね。
こっちの人は…イク、でどうかな？」
「イク」
「大丈夫そうだねえ。どうかな、イクレア」
「…かまわない」
「決まりだね」

アルは楽しそうに笑い、イクは微妙な表情だった。
ちゃんと発音できるようにならないとなあ…帰るまでの辛抱だ、頑張ろう。

「さてお嬢さんのお名前は？」

…あ。

自己紹介、してなかった…。
もうほんと私駄目だなあ…はー…。
とりあえず気を取り直して、自己紹介をする。

「日野莉麻です」
「…どっちが名前だ」
「莉麻、です」

そっか、こっちだと苗字と名前逆なんだ。
覚えておこう…。

アルはへえ、と素っ頓狂な声を上げた。

「リマかあ。ジュレイトが信仰している神の名前だ」
「え？」

神の名前？
…私の名前、そんな大層なもんじゃないんだけどなあ。

「うん、リマちゃんね。覚えた。イクレアは？」
「当然」
「よし。じゃあリマちゃん、侍女を連れてくるからちょっと待ってて」
「侍女っ？」

え、何ソレ…まさかドレスとか着させる気じゃないよね！？

思わずイクさんに訊いてしまう。

「あの…イクさん、私何されるんですか」
「とりあえず湯浴み、そして着替え、あとは晩餐だ」
「ば、ばんさん」

凄い豪華そうな単語…。
そいえばここどこ？
ずっと忘れてた…。

また訊こうとしたところに、アルさんが戻ってきた。
隣には紫の髪の同い年くらいの少女。

「リマちゃん、この子が君の侍女のミリアレイナ。うーん、ミリアって呼べるかい？」
「はい、呼べます。ミリアさん…ですよね」
「さん付けはご不要ですリマ様。どうぞミリア、と」
「え、でも」
「良いの良いの。年近いんだし、仲良くね」

良いのかな…じゃあ、気兼ねなくミリアって呼ばせてもらおう。

「これからよろしくね、ミリア」
「こちらこそ…こんなに愛らしいご主人様でミリアは幸せものですわね」
「そんな、ミリアも可愛いよ」
「まあ…！ありがとうございます」
「えー…盛り上がりかけてるとこ申し訳ないけど、」

アルさんが申し訳なさそうに言った。
そうだ、やることといっぱいだった…！

「とりあえず準備をして、それからおしゃべりの時間にしよう。
晩餐に間に合わなくなってしまうかもしれないからね」
「そうですわね…申し訳ございません。ではリマ様、こちらへ」
「は、はいっ」

わああ…どうなっちゃうんだろうか私。
家に帰れるのはいつになるのやら。

———私はこのとき、ヒュウガのことをすっかり頭の隅に追いやってしまっていた。

これから、彼を中心に色々なことに巻き込まれていくことも知らずに———

4　城内にて　私は今、（後書き）

疲れた…

もしかしたら直すかもです（，・ω・、）

5　城内にて　私は今、2

「まあ。リマ様の御髪はとても綺麗な黒ですのね」
「そう…かな。私がいたところは、これが普通だったよ」
「皆黒髪なのですか？」
「うん。ああでも染めてる人とかもいたからなー」

そんな他愛もないことを話しながら、湯浴みを終えてゆく。
突然服を脱げと言われたときは驚いたけど、お風呂に入るんだから当然のこと。
服もここと は全く違う服を着ていたから、ミリアに不思議そうに見つめられた。
「変わったお召し物ですね…」としげしげと観察されて、ちょっと微妙な気分だったが、何も言わなかった。

「さて、コレで良いですわ。次はドレスですわね！」
「ドレス…」

うわー…着ちゃうんだ私。
あっちでは滅多に体験できないことだけど、こっちでは普通なんだろうしな。
うーん、あんまりフリフリは好きじゃないんだけど、我慢するしかないかあ。

ミリアが出してきたのは、薄桃色の精緻な、でも派手すぎないドレスだった。

「如何ですか？」
「…うん。これなら恥ずかしくない」
あんまりゴテゴテしてたらどうしようと思った…！
私の返事に安心したミリアは安堵の息をつく。
「ではコレにいたしましょう。手伝いますので、お着替えを」
「ん。わかった」
「まずはですね…」

＊＊＊＊＊

イクレアとアルベールは別室で待機していた。
二人の間には特に会話もなく、静寂が辺りを包んでいる。
アルベールは何故か上機嫌で、にこにこしていた。
イクレアはそんなアルベールの様子を見て、思わず問うた。
「…何故お前はそんなに機嫌が良いんだ」
するとアルベールは「ん？」とこちらを向き、にっこりと笑う。
「だって楽しみじゃないか」
楽しみ？

何がだ…？

さっぱりわからないイクレアは黙り込んでしまった。

「わかんないの？駄目だなーイクレア。そんなんだから２０歳になっても恋人とか出来ないんだよ」

「余計なお世話だ」

「僕はねえ、神持ち子――――リマちゃんのドレス姿が楽しみで仕方がないんだ」

「…侵入者のか」

「だからさあー、侵入者じゃないってば。１年前僕が『神持ち子』を呼ぶために構築した魔法陣が、急に稼動したんだ。リマちゃんは侵入者じゃないよ、選ばれし女性」

アルベールは「何でわかんないかなーっ」とむくれていた。

２０歳にもなって大人気ない。

「何故１年も放っておいた」

あえてそこに触れてやると、アルベールは少しばつが悪そうに頬を掻いた。

「あー…実はさ。１年前あの魔法陣、僕が念じても詠唱してもぜんっぜん稼動してくれなくて」

「…だから放置したのか…」

「仕方ないことだって。だって５日も粘ったんだよ？諦めるのも当然」

そこでアルベールは話を戻した。

「ところで君は本当にリマちゃんのドレス姿が楽しみじゃないのかい？」
「ああ」
イクレアが正直に答えると、信じられない、というようなカオになった。
…そんなに変か。
「だって気づかなかったの？あの子変わった服を着ていたけど、とても綺麗な体つきをしていたよ。
肌は白いし手足は細い、おまけに腰は細くて胸は大きすぎず小さすぎず」
「お前はどこを見ている」
「一応僕だって男だもん、仕方ないことだと思うよー」
はあ、とイクレアはため息を吐いた。
こんな男が聖騎士で良いのか？
イクレアがアルベールに呆れていると、室内にノックの音が響いた。
「失礼いたします。リマ様のご準備が整いました」
「お、そっかあ。入って入ってー！」
「では」

きい、と扉が開く。
おずおずと部屋へ足を踏み入れてきた少女は、不安げに此方を見ている。

アルベールは笑みをカオに貼り付けたまま固まっていた。
イクレアも、腕組みをし足を組んだ状態で硬直していた。
そんな二人の様子を見て、莉麻はおろおろしだした。
「あ、あの…何か変ですか？ミリアが大体やってくれたんですけど」
その言葉を聞いて、アルベールは正気に戻った。
イクレアもはっとする。
俺は今、何を――――？

「いや、全然、全っっ然変じゃないよ。とても似合ってる」

それは決してお世辞ではなかった。
すらりとした体に、少しタイトなデザインのカジュアルなドレスはとても良く似合っていた。
薄く化粧をした顔も、とても美しいものだった。

「イクさんは、どう思いますか…？」
「！、俺か？」
「はい…初めて着るので、みんなに訊かないと不安で」

どう、と訊かれても。

迷っているイクレアを見て、アルベールは小さく笑った。

「正直に言ったらどうかなあイクレア。見蕩れてた、って」
「なっ」
「ふえっ！？」
「まあ」

アルベールの発言に、そこにいた人物全員が驚いたような反応をした。

「み、見蕩れてなど…」
「あーいやまあそこは良いとしてもさ、似合ってるし綺麗でしょ？」
「っ…」

アルベールはにやにやと此方を見て微笑み。
ミリアは面白いことになったとでも言いたげな表情だ。
莉麻はまだ良く状況がわかっていないようで、不安そうにイクレアを見つめていた。

イクレアは少し不機嫌そうに述べた。

「まあ、悪くない」

そんなイクレアの感想に、アルベールとミリアは盛大に噴き出した。

5　城内にて　私は今、２（後書き）

つ…ツンデレｗｗ
イクレアくぬやろう、次回もっとデレさせてやる（（
あ、次はヒュウガも出るかもですー

6　城内にて　私は今、3

アルベールとミリアレイナが笑い終わったところで、４人は晩餐の会場へ向かった。
莉麻はかなり緊張していて、小さく体が震えていた。

（怖い）

急にそんなことを思ってしまい、知らず知らずのうちに自分の体を抱いた。
うつむき、唇をきゅっと引き結びながら歩いていく。
途中ミリアレイナが不安そうに「大丈夫ですか？」と訊いてきたが、「緊張しているだけ」とごまかしておいた。

しかしそれでも、イクレアとアルベールには気取られてしまった。

「リマちゃん」

アルベールがそっと話しかけてくる。
恐る恐る顔を上げ、彼の顔を見上げた。
綺麗な翠の瞳が、優しく莉麻を映していた。

「緊張しなくて良いよ。今日の晩餐は、ただのお披露目。適当に自己紹介したら、あとは美味しい料理を堪能してて」
「……自己紹介」
「そっ。名前と、うーん…まあ、よろしくお願いしますって言っとけば大丈夫。あとは僕とイクが何とかするからね」

本当にそれだけで良いのか、とも思ったが、それに越したことはな

い。
ただでさえ人前に出るのは苦手なのだから。
それにしても、と莉麻は後ろを振り返る。
「イクさんは…どうしてそんな離れてるんですか？」
イクレアは3人から5メートルほど離れて歩いている。
それを指摘されたイクレアは、僅かに居心地が悪そうな顔をしたが、答えてくれた。
「別にお前らと一緒に並んで歩く必要はあるまい」
そしてふいっと顔を背けてしまう。
莉麻はそれはそうだけど、と思ったが何も言わなかった。
何か言って怒られるのは嫌だったからだ。
もう、あんな思いはしたくない。
過去のことを思い出しそうになり、思わずぎゅっと目を瞑る。
（あれはもう過ぎたこと、忘れなきゃ）
莉麻が黙っていると、アルベールが割り込んできた。
「その言い方はどうなのかなあ、イク。ほら、リマちゃん黙り込んじゃったよ？」
…あれ、傷ついたわけじゃないんですけど…。

そう言いたかったが、言うタイミングを逃してしまった。

「な…本当のことだろう」

「そーだけどねえ。…駄目だなあー、対人外は最強でも対人は最弱だ」

「アルベール…お前、」

「はいはい後で後でー。晩餐の場に着きましたよ、神官殿？」

その言葉で、４人の中の空気が一気に引き締まる。

きい、とアルベールが扉を開ける。

――――俺が、守る番だ――――

遠くで、ヒュウガの声が聞こえた気がした。

＊＊＊＊＊＊

一歩部屋に踏み入れると、ざわりと会場がざわめいた。

莉麻、イクレア、アルベールの順に席へ着く。

ミリアは扉の近くでたたずんでいた。

刺さる、視線。

嫉妬、疑惑、憎悪、恐怖、好奇、羨望、様々な感情がこもっている視線という剣たち。
それは少しずつ莉麻を痛めつけていく。
かたかたと体が震える。

「皆さん、お集まりですね」

アルベールが挨拶をする。
その声もどこか遠くの音に聞こえる。
恐怖に支配されかけた莉麻を、イクレアの囁き声が連れ戻した。
「…怖気づくな。名前と一言言えば終わる…もうすぐだ」
莉麻を見てはいなかったが、それは確かに莉麻に向けられた言葉。
思わぬ励ましに驚きながらも、こくりと頷く。
先ほどよりは精神が安定してきた。
（…私ってこんなに弱かったっけ）
自分の惰弱さを思い知っていると、アルベールの声が会場に響く。
「では、神持ち子様より…一言」

莉麻は勇気を振り絞って椅子から立ち上がり、きっと前を見据える。
かち合う視線。
それにもう一度支配されそうになったが、何とか引きとどまる。

「…リマ・ヒノと申します。よろしくお願いいたします…」

それだけ言い、ぺこりと頭を下げ席に着く。
心臓はばくんばくんと強く脈を打っていた。

（ど…どうして、こんなに怖いの？人前に出るのは苦手だったけど、こんなになったことはない！）

感じるのは緊張と視線だけだったはずなのに。
今は恐怖が何よりも強かった。

莉麻が挨拶を終え、シンとなっている会場に、ひとつの声が響いた。

「…汚らわしい」

ガタン、と立ち上がる音。

カツカツと近づいてくる気配。

感じる憎悪。

「お控え下さい、エオルド様！」

アルベールの、怒り交じりの声。

隣で立ち上がる気配。

だがそれよりも先に、胸倉をつかまれ、無理やり立ち上がらせられた。

目と鼻の先に、赤の双眸。

それに感じた、恐怖。

「…その手を御放し下さい、男爵」

イクの低い、低い声。

それに続く、憎悪のこもった声。

「神持ち子など…今のこの国には必要ない」

ぎりぎりと強くなる手の力。

私はただ恐怖で動けず、されるがままだった。

それに更にイラついたのか、視線が鋭くなる。

「黒の髪と瞳か。…気味が悪い」

そして、続く言葉は。

「汚物が」

とうとうアルベールとイクレアが男爵から私を引き剥がそうとしたとき。

私の中でまた、響く。

パキン、という軽い音。
そして、

「愚者が」

私の口から出た、私のものではない、低い声。

イクレアとアルベール、そしてエオルドと呼ばれた男爵が目を瞠(みは)った。

私の体は勝手に動く。

男爵を払いのけ、宙にふわりと浮く。

その周りには、いつか見た、幾つもの七色の光の玉。

（ヒュウガ、）

今私の体を支配し、顕現したのは――――

私の初めての「ともだち」だった。

6　城内にて　私は今、3（後書き）

うおうヒュウガ登場第一声いっつもすげえ言葉だなｗｗｗｗ

7　城内にて　私は今、4

二度目のヒュウガの顕現。
だが今回は、初めて顕現したときと違った点があった。

（私の意識が、はっきりある）

以前はヒュウガの意識が体を支配すると、莉麻の意識は無くなって行った。

どういう変化かわからないが、体が順応したということかもしれない。

落ち着いて周りを見回すと、宙に浮く「私」の姿を見つめるイクとアル、そしてヒュウガを顕現させる原因となったであろうエオルド男爵の姿。
そこでも、あることに気づく。

（…名前が聞き取れるように、なってる）

これもヒュウガと何か関係があるのだろうか？

そんなことを考えていると、ヒュウガが口を開いた。

「莉麻を侮辱することは、神名（シンメイ）ヒュウガにおいて許さない」

シンメイ…？

聞き慣れない言葉が出てきて困惑したが、すぐにはっとする。
エオルド男爵が、赤い光線の様なものを私の体に向け、放ったからだ。
しかしヒュウガは避けない。
思わず、（死ぬ）と思った。
しかしそうはならなかった。

ヒュウガは何かを呟く。
すると、ヒュウガの前に七色の魔法陣が現れた。
それは赤い光線から私の体を守り、光線を跳ね返した。
エオルド男爵は「ちっ」と舌打ちし、自らが放った光線を避ける。

そしてまたヒュウガが口を開いた。

「聞こえなかったか、ジュレイトの貴族。俺の名はヒュウガ。貴様らが信仰している神の一人だ」
「なっ」

神…？
ヒュウガ、が？

あの花園での日々が、断片的に思い出される。

あの少年は、自分のことをなんと称していた？

（あ…）

＊＊＊＊＊

「ねえ、ここどこぉ…？ひっく、おうちかえりたいよぅ」

幼い私は泣きじゃくっていた。
そんな私の傍で困った顔をしている、幼い私より2～3歳年上の少年。
少年はそっと私の頭を撫でた。

「ごめん…俺にはどうすることも出来ない。今はここにいるしかないんだよ、俺も君も」

少年は悲しそうな、諦めたような顔をした。
それを聞いた私は、少年にすがる。

「ふえ、う…おかあさあん…おとぉさあん！どこおー！？
りま、おうちかえりたい――！」

両親を呼びながら、少年の細い胸に顔をうずめる。
私の言葉を聞いた少年は、驚いた顔になる。
そして、何かを決意したような顔へ変化した。

少年は私に語りかける。
「りま…というんだね。
今までどうして君が『花園』に呼ばれたのかわからなかったけど、
ようやくわかったよ。
君は…俺の愛した女神、リマ。人ではない存在なんだ。
だから俺がもう一度リマに逢いたいと思ったとき、君が現れた…」
幼い私は全く理解できなくて、混乱している。
それでも少年は続けた。
「急に俺の前から消えたと思ったら…そ、っか。
『変わり時』だったんだね。
以前のリマとしての記憶は残っていないんだろう…」
そうして少年は少し悲しそうに笑った。
不安そうな顔で己を見上げる私に向け、そっと。
慈しむように。誓うように。
「きっと、思い出す。
楽しかった思い出も、悲しかった思い出も全部。
…俺が、思い出したように。
時間はかかると思う。
けど俺はいつまでも待つから。
いつかきっと、君が俺を思い出してくれるまで」
そして優しく、私の額に口付ける。
「俺は君を守るよ。

ここでも、
…いつか君がここを出て、下界へ行かなくてはならなくなったときも。
ずっと一緒に在るから。
だから安心して。
…一緒にいよう、りま」

幼い私は「いっしょにいよう」くらいしか理解できず、しばらくぽやんとしていたが、やがて口を開いた。

「…じゃあ、りまと、ともだちになってくれる？」
「友達？」
「うん、ともだち。いっしょにいるんでしょ？」

それを聞いた少年は、少し呆けていたが、やがてふっと笑った。

「わかった。俺と君は今からともだちだ」

私はその言葉にぱあっと顔を輝かせた。

「はじめての、ともだちだー！」

そして立ち上がり、ぴょんぴょんと跳ね回る。
そんな私に、少年は心配そうに見守りながら話しかけた。

「うん、ともだちだよ」
「えへへ、やったあー。よろしくね、…あれ」

そこで私は首を傾げる。
初めて気づいた。

私は、

「…おなまえ、なんていうの？」

少年の名前を知らなかった。
それを言うと、少年は「しまった」という顔になる。

「ごめん…言い忘れてた。

俺は、全能の神ヒュウガ。

よろしくね、りま」
「ひゅうが、ヒュウガ！
よろしくね！」

そして世界は反転し――――

＊＊＊＊＊

（ヒュウガ。そうだ、あの子はヒュウガだ…！）

私は突然流れ込んできた記憶に呑まれていたが、なんとか意識を会場に向ける。

ヒュウガは、全能の神。
そして私は、そのヒュウガの愛した女神――――

ヒュウガに話しかけようとすると、ヒュウガはすでにエオルドを魔法陣で動けなくし、殺そうとしていた。

（駄目！待って、ヒュウガ！！）

必死に自分の体に意識をもぐりこませる。
すると、ヒュウガの声が聞こえた。

「やっと…」

嬉しそうな、声。

「やっと、俺を思い出してくれたんだね…莉麻」

そして、パキンという音とともに体の感覚が戻ってくる。
私に戻ったのだから床に落下するだろうと思っていたので、思わず身を固くしたが、何の衝撃も来なかった。
宙に浮いたままだ。
そのかわり背に人の暖かさを感じた。
それに驚いていると、さらに後ろから腕を腰に回され、抱え込まれ

る。

思わず後ろを向いてみると、そこには。

綺麗な肩位まで伸びた藍の髪。
長めの前髪から覗く、澄んだ水色の瞳。
豪華な細身の長い服。

間違いない。

優しく私に微笑みかける、その青年は。

「ヒュウガ…！」

私は何故かとても嬉しくて懐かしくて、体の向きを変え、ヒュウガに抱きついた。
そんな私を、ヒュウガは強く胸に掻き抱き。

そして、そっと私に囁く。

「…１０年前に、『花園』を出て以来だね。
久しぶり、莉麻」

ヒュウガは「逢いたかった」と更に強く私を抱き寄せた。

7　城内にて　私は今、４（後書き）

まあ…なんてリア充。

イクレアたち置き去りで二人の世界展開しちゃ駄目よ！ｗｗ

8　城内にて　私は今、5（前書き）

ちょっとイクレア視点入ってます。

8　城内にて　私は今、5

エオルド男爵がリマの胸倉を掴むと同時に、イクレアは立ち上がった。
アルベールもエオルド男爵のすぐ近くに移動してきた。

「…その手を御放し下さい、男爵」

いくら上流階級の貴族とはいえ、横暴は許されない。
何より――――

（気配…）

あのヒュウガとやらが出てくる気配が感じられた。
純粋で、強すぎる魔力。
あの男は何者なのか…あれ以来ずっと考えていた。
リマは知らないらしいし、アルベールもまだハッキリとは分からない、と言っていた。
ならば、あの男は何なんだ？

「神持ち子など…今のこの国には必要ない」

エオルド男爵の声が会場に響く。

イクレアは更に目を鋭くし、エオルドの動きとヒュウガの気配に神経を研ぎ澄ませた。

まさに、一触即発。

「黒の髪と瞳か。…気味が悪い」

リマへの憎悪のこもった罵倒はエスカレートしていく。

そして、ある変化が起き始めた。

（――――リマの魔力が――――膨大な量になりつつある！）

そして、エオルド男爵は一言発した。

それが、ヒュウガの顕現に繋がるとも知らずに。

「汚物が」

イクレアとアルベールが同時にエオルド男爵に手を伸ばす。

イクレアの中で、彼自身にもよくわからない苛立ちが一気に押し寄せてきた。

（――――あんたは何も知らないだろう！リマがこの席でどれだけの恐怖と戦っていたか！！）

それなのに、あんたは。
なんてことを、リマに――――！

伸ばした手がエオルド男爵に届いたとき。
それは起きた。

「愚者が」

リマの体が宙に浮き、幾つもの七色の光の玉が周りに出現する。

ヒュウガが、姿を現したのだ――――

イクレアはそれを理解すると同時に、臨戦態勢に入る。
ヒュウガはリマの味方なのであって、こちらの味方ではない。
だが、以前のように魔法を放つ寸前までは入らなかった。

逆にそれが、ヒュウガを刺激するような気がしたのだ。
そして、あることに気がつく。
（リマの意識が、消えていない…？）
確かに感じる、リマの存在。
以前とは明らかに違う。
リマが順応したのだろうか。よくわからないが、リマの意識はある。
イクレアたちが呆然と見上げていると、ヒュウガが口を開いた。
「莉麻を侮辱することは、神名（シンメイ）ヒュウガにおいて許さない」
――――神名！？
イクレアは驚愕した。
神名とは、そのまま、神の名前。
…ただし、トップの。
そうすると、ヒュウガは。
（全能の神、だったのかッ…！）
リマの中に何らかの神がいることは分かっていたが、まさか…神の中でもトップの全能の神とは。
余計混乱する。

リマと全能の神・ヒュウガの間に何がある？
いや、あった！？
イクレアが少し目を放している間に、事態は悪化していた。
エオルド男爵が、赤い光線をヒュウガ――――リマの体に向け放ったのだ。
――――何をやっているんだ、あの男爵はっ！
イクレアは苛立ちとともに男爵を止めに、一度臨戦態勢を解いた。
男爵にやめるよう言おうと口を開いたときだった。
何らかの詠唱が聞こえたのだ。
聞こえたほうに目を遣ると、ヒュウガの前に七色の魔法陣が現れた。
そしてそれは、赤い光線をいともたやすく跳ね返す。
条件反射でイクレアも後方へ飛ぶ。
アルベールとエオルド男爵もちゃんと避ける事が出来たようだ。
それに少し安堵していると、またヒュウガの声が会場に響いた。
「聞こえなかったか、ジュレイトの貴族。俺の名はヒュウガ。貴様らが信仰している神の一人だ」
「なっ」
イクレアもこの言葉には驚かされた。
ジュレイトが…ヒュウガを？

そんな話は聞いたことがない。

（どういうことだ…！？）

イクレアが混乱していると、リマの意識が揺らぎ始めたことに気づく。

――――呑まれかけている。

何かは分からないが、強い流れに。

そう感じた瞬間、イクレアは叫んだ。

「リマッ！！」

だが、それは一瞬のことで、すぐに意識が戻り始めた。

そのことに安心したのもつかの間。

エオルド男爵の足元に、七色の魔法陣が現れた。

それが輝き始めると、エオルド男爵は硬直してしまった。

殺すつもりなのだ、と肌で感じた。

ヒュウガから感じられるのは、残酷な殺意。

そして、ヒュウガが詠唱しようとしたとき。

リマの意識が強く感じられるようになった。
はっとヒュウガの方を見やると、変化が起きていた。
リマの体が、強く輝いていた。
思わず腕で目をかばう。
その直前に見えた、リマの背後の影。
聞こえる、言葉。

「やっと…」

その声は歓喜に満ち溢れているようだった。

「やっと、俺を思い出してくれたんだね…莉麻」

次の瞬間、リマの意識が完全にリマの体に戻ったことを感じた。
だが、ヒュウガの意識も消えていない。
どういうことだ、とリマを見ると。
リマを背後から抱え、優しく微笑む藍の髪の青年。

その青年から溢れ出る、魔力。

あれは。

「ヒュウガ…！」

莉麻の嬉しそうな声が会場に響く。

ヒュウガが、実体を持って現れたのだ。

驚きで固まっていると、二人は宙で深く抱き合った。

…更にそれに硬直する。

だが、次のヒュウガの言葉が更に更に追い討ちをかけた。

「…１０年前に、『花園』を出て以来だね。

久しぶり、莉麻」

花園、だと…？

そこは———

そしてヒュウガは「逢いたかった」と続けた。

己が放った「花園」という単語が、どれだけイクレアたちを驚愕させたかも知らずに。

8　城内にて　私は今、5（後書き）

長くなった。
ヒュウガのたらし…！

きっとイクレア、一目惚…いえなんでもありますん（（（
これについての番外編も書きますゆえ、よろしくお願いいたします
＞＜

評価・ブクマありがとうございます！
嬉しいです＾＾

9　過去と真実

私はきっと、ヒュウガに逢いたかったんだ。
とても懐かしくって、嬉しくって。
みんなが見ているとか、宙に浮いてるとか、どうでも良くなった。
今は、ただ。
ヒュウガの温もりが、愛おしい。

「…会場にお集まり頂いた皆様方。申し訳ありませんが、御退室してくださいませ」

アルが緊張した声で貴族達に指示を出した。
そっと顔を下へ向ける。
あっけにとられていた貴族たちは、素直に出て行く。なかには恐怖で泣いている者もいた。
残った人物は私とヒュウガ、イク、アル、エオルド男爵。
ミリアも残ろうとしていたが、アルに視線で退室を促され、渋々出て行った。

そして静寂が部屋を包み込み始めたとき。
ヒュウガがそっと地へ降り立つ。
私の靴がコツ、と音を出した。

「さて、魔術師3名」
ヒュウガは私を抱きしめたまま話し始めた。
イク達はヒュウガを鋭く睨み付けていた。
だが彼はそれを完全に無視し、続けた。

「望みは何だ」
「望み、だと？」
イクが眉を顰めながら聞き返す。
アルはヒュウガを睨みながらも、別のことを考えているようだった。
エオルド男爵だけが、答えた。

「栄光を。…先ほどまでの無礼、お許し下さい…全能の神よ」
莉麻に詰め寄ったときとは全く正反対の態度でヒュウガに頭を垂れる。
そんな男爵に、私もイクも冷たい視線を送った。
だがヒュウガは、は、と軽くあざ笑うだけだった。
美しい顔が、澄んだ瞳が冷酷な表情を作る。

「流石は汚れに汚れた貴族殿だ。素直、そしてゴマスリが上手いな」
「…っ、申し訳…」
「謝らなくとも良い」
ヒュウガはエオルド男爵に向けていたのとは打って違ってとても優しいまなざしで、私を見つめた。
そしてゆっくりと私の髪を梳く。

その心地良さに、ぼうっとなってしまった。
ヒュウガは名残惜しそうにそっと私を放した。
ヒュウガはつ、とイクを見遣る。
イクはその視線を真っ向から受け止めていた。
「…何か？」
挑戦的な態度。
だがヒュウガはそれが気に入ったらしい。
ふっと軽く笑った。
「いや。お前になら、少しの間莉麻を預けても良いかもしれないな、と思ったまで」
「…俺がですか。何故でしょう」
「濁りがない」
ヒュウガは即答した。
それにイクは理解できないと言うように少しだけ顔を歪めた。
藍の髪を揺らしながら視線を移し、エオルドを見下ろす。
「男爵。顔を上げろ」
「はっ」
ぱっと顔を上げた男爵。
その瞳は、欲に塗れていた。
エオルド男爵の瞳を見て、莉麻は吐き気を催した。
（…こんな、男に。触られた…）

別に男性恐怖症なわけでもないのに、激しい嫌悪と恐怖に苛まれる。
足元がゆらゆらと揺れる。
めまい、頭痛、吐き気、恐怖。
ぐらりと傾く体。
倒れる、と思ったがそれは起こらなかった。

「あ…」

ヒュウガとはまた別の。
だけど優しい、青。

その手が、腕が、私を支えていた。

少し心配そうに水色の瞳が私を覗き込んでいたが、大丈夫だと口を動かすだけで伝えると、安心したようだった。
そしてイクはヒュウガを睨む。

「何故リマを、支えに入らなかった」
「お前が気づくかどうか、試した。…リマには、本当に申し訳ない」
ヒュウガがとてもつらそうな顔になる。
そのことに莉麻も悲しくなった。
ヒュウガ、ヒュウガ。

私、大丈夫だから。
イクが、支えてくれたから…。
そう伝えたかったが、体は重く、意識を保つので精一杯だった。

「試して、どうするつもりだった」

イクの口調から敬語は消えていた。
だがヒュウガは気にも留めず、答える。
名残惜しそうに、私に手を伸ばし、髪を梳きながら。

「俺は今から神々に会わねばならない…しばらく時間がかかる。
その間、莉麻を守ってくれる人間が必要不可欠だ。
力があり、だが欲に溺れていない人間が」

そしてヒュウガは、いつの間にかこちらをじっと見つめていたアルにも目を遣る。

「お前にも頼みたい。イクレア・アグリット、アルベール・ウィジー。
二人で、莉麻を守って欲しい」

それにイクもアルも驚いたようだった。
全能の神直々の、願い。
驚かない人間はいないのだろう。

少し間をおいて、イクが少しお辞儀をした。
それにアルも続く。
そして二人が同時に言葉を紡いだ。

『神の願(がん)は唯一。
守らねばならん、唯一。
叶えねばならん、唯一。
神に仕える神国ジュレイトの名において、永久(とこしえ)の忠誠を』

その綺麗な言葉達に、莉麻の感じていた嫌悪感や恐怖も、少し和らいだ。

ヒュウガはしばらく二人を見つめていたが、やがて小さく微笑んだ。

「頼んだぞ」

そう言ってふわりと宙に浮き、消えようとしていたが、思い出したように下を見る。

その視線の先には、呆然とヒュウガを見上げるエオルド男爵の姿があった。

ヒュウガは冷たい、冷たい視線を彼に向け、イク達を一瞥する。

「…莉麻に無礼を働いたその醜い男のことは…拷問でもしてから殺して欲しい」

慈悲を与える神とは思えない言動に二人は訝しげな顔をした。

エオルド男爵は真っ青になり、かたかたと震えていた。

二人は気を取り直し、またそろって言葉を放つ。

『神の仰せの通りに』

その返事に満足したような笑みを浮かべ、ヒュウガはふっと消えて

しまった。
私はもう意識がなくなりかけていたが、その前にイク達がそっと話し掛けてきた。
「…聞こえてはいただろう。
本来ならばお前にも敬語を使わねばならないのだが…嫌だろうと思って使っていないんだが。
それで良いか？」
全然かまわない、寧ろその方が嬉しいと視線で訴えると、イクは小さく息を吐いた。
アルは優しく、そっと私の頭を撫でる。
イクもそれを咎めたりしない。
そしてアルは、ゆっくりと話しかけてくれた。
「今日はゆっくり寝て、休もうね。僕かイクが必ず傍につくから。安心して体を休めて、明日の朝は元気な君が見れることを楽しみにしてるよ」
この言葉を聞いて安心し、嬉しく思った私は、きっと弱弱しかっただろうけど笑った。
それを見たアルは柔らかく微笑んだ。
イクも少し、ほんの少しだが優しく微笑んだ…気がした。
そして私は、ゆっくりと深い眠りに落ちていった――――

＊＊＊＊＊＊

「寝ちゃったね」

「ああ」

よほど疲れていたのだろう。

何をしても起きそうになさそうだ。

その安らかな少女の寝顔を見ているのも心が癒され、しばらくそうしていたかったのだが。

二人にはやることがひとつあった。

「さてー、エオルド男爵さん」

「ひいっ」

莉麻に詰め寄ったときのあの横柄な態度はいったいどこへいったのやら。

ひどく怯えた様子だった。

まあ、神に「拷問でもして殺して欲しい」と言われたりしたのだから当然と言えば当然だが。

そんな男爵を軽蔑するような視線で見ていたアルは、イクを振り返る。

「うーん、でもまずはリマちゃんを休ませてあげないといけないかなあ。

イク、良い？僕こいつ何とかするからさー」
「分かった。聞きたいこともあるから、区切りの良いところで交代してくれ」
「りょーかい。僕もちょっと神話とか調べないといけないみたいだしね。
それに会場にいた人達の記憶だけど」

全能の神とその愛した女神をみてしまった人々。
彼らに罪はないが――――

「消すしかないよね」
「…ああ。手伝う」
「うん、ありがとう。…じゃ、早くリマちゃんを運んであげなよ」
「そうする。また後で」
「後でねえー」

パタン、とイクレアは扉を閉めて出て行った。
それを確認したアルベールは男爵に目を向け、冷徹に言い放つ。

「さて、懺悔の時間だよ？」

男爵は恐怖と絶望で気を失った。

9　過去と真実（後書き）

ヒュウガ、莉麻に対する口調とその他の人々に向ける口調違いすぎｗｗｗ
まあそのくらい、すきなのです。きっと。

お気に入り・評価ありがとうございます！

１０　過去と真実２

ぽふり、とリマの体をベッドの上に下ろす。
リマは熟睡しており、目を覚ます気配は全くない。
そんな少女を、イクレアはじっと見つめる。

細い、華奢な身体。
白く柔らかそうな肌。

（……消えそうだ）

今にもふっと消えてしまいそうなほど、儚い。

イクレアはそっと、ベッドの傍にあった椅子に腰掛ける。
より至近距離で彼女の顔を見つめる。
じっくりと彼女を観察していたが、途中で先日のことを思い出した。

彼女を初めて見たあの時。
己が感じたのは、なんだったか。

まだ神持ち子だとは知らず、侵入者だと思っていた。
だから、殺しに行った。
少女だとは聞いていなかったから、少女ということにも少なからず驚いた。
だがそれよりも、イクレアは彼女の弱弱しさに驚かされた。

大き目の澄んだ瞳から流れる、透明な雫。
小さく震える唇。

自分を真っ直ぐに見つめる、涙に濡れた美しい双眸。

鼓動。

想像していた姿よりずっと、ずっとかけ離れた姿の侵入者…だと思っていた人物。
見た瞬間強く感じた、己の鼓動。

よくわからないまま、口を開いた。

会話をしているうちに、また彼女のことが分からなくなった。

あまりに無知で、弱い。

それでも自分に与えられた使命は全うしなければならない。
だから、質問に答えない彼女に向けて、酷いことを言ってしまった。

（…殺す、など）

少女は何も悪くなかったのだ。
ただ恐怖と不安に呑みこまれていただけだった。
なのに自分は。
知らなかったとはいえ、なんてことを。

「すまな、かった」

自然と謝罪が口をついて出た。
そしてそっと、彼女の髪を梳く。
これまで女になど微塵も興味がなかった。
けれども、何故だかわからないが。

触れたいと、思った。
守らねばならないと、自分で。
ヒュウガを守り、ヒュウガに守られてきた少女。

まだ謎に包まれている部分が多く、いつ国の脅威になるかわからない。
そのとき自分は、少女を――――リマを殺せるだろうか。

普段ならなんの躊躇いもなく「殺せる」と思うはずなのに、何故だかそうは思えなかった。

＊＊＊＊＊＊

がしゃあんっ！

耳障りな音を地下に響かせながら鉄格子がはまる。
それを行った張本人アルベールは、鉄格子の向こうに佇む男爵に向けて口を開いた。

「しばらくここで絶望を噛締めててね。神が許さない限り、君は必ず近いうちに死ぬよ」

いつもの砕けた口調は消え去り、真面目に言葉をつむいでいく。
視線の先には、ガタガタと震えるエオルド男爵。
アルベールは蔑んだ目で彼を見る。

「僕はここを離れるけど、その代わりここにはイクレアがくるから。彼、君に色々質問したがってたよ。しっかり答えないと命が危ないんじゃないかな。
まあどうせ消える命だけど」

そこで彼は一度言葉を切る。

そして、出口へ向かいながら。

「苦しんで死にたくはないでしょ？」

そう残して、扉を閉めた。

１０　過去と真実２（後書き）

更新遅くなってすみません＞＜
学校まじ大変です…しぬ

11　過去と真実3

がちゃり、と扉が開く。

イクレアが振り向くと、アルベールが立っていた。
彼はベッドに近寄りながらイクレアに話しかけた。

「エオルドだけど、もって1週間だよ。精神崩壊が近いね。
正確な情報を得たいなら、早めにしなよ」
「わかった」

アルベールからの報告に、イクレアは今から聴取しに行こうと立ち上がろうとした。

だが。

ぎゅうっ。

「…ッ！？」
「ふはっ…！」

莉麻の右手がそれを阻んだ。

莉麻が掴んだのはイクレアの長く青い髪。
思いのほか力が強く、無理に引っ張ったら抜けそうだった。
イクレアは予期せぬ事態にあせり、困惑した。
そんな様子を見て、アルベールは盛大に吹き出した。

後ろでツボにはまっている聖騎士を感じ取りながら、手を放させようとイクレアが莉麻に近寄る。
そして、彼女の手を取ろうとしたのだが、その手は止まってしまった。

「っう…ふぇええー、ひっ、うっく」

莉麻が泣き出したのだ。
流石にアルベールも笑いを引っ込めて彼女に駆け寄る。
そして優しく声を掛けた。

「どしたの、リマちゃん。怖い夢でも見た？」

アルベールの声に反応し、莉麻の瞼がゆっくり開く。
涙に濡れた黒い瞳が二人を映す。
薄い桃色の唇が、震えながら動いた。

「おかーさぁん、おとぉさぁんッ…怖いよ、う、ひゅうがあー」

その言葉は、彼らの心に深くしみこんだ。
イクレアはもう一度椅子に座り、莉麻の言葉を聞くことにした。

「アルベール。悪いが聴取はお前がやってくれ。俺は」
「わかってるってー。任しといてよ、ね！君はお姫様の傍にいてあげな」
「…ああ」

言葉にしなくても、聖騎士には伝わったようだ。

アルベールはもう一度莉麻を見やり、優しい笑みをこぼして部屋から出て行った。
それを見届けたイクレアは、莉麻に視線を向ける。
少女はまだ、嗚咽を上げ、泣いていた。

「帰りたい、うぇ、帰りたいぃ。助けてよぉ、怖いよぉっ…！」

イクレアは彼女の言葉を聞きながら、そっと優しく彼女の頭を撫でてやる。

叶えてあげられないかもしれない、莉麻の願い。訴え。

それに対する、少しもの謝罪として。

すると莉麻は、またぼろぼろと涙を流した。

「助けて、怖いよぉ…ぅ、赤い目の、人、怖いよっ…！！」

そしてそれに続く言葉。

「助けて、いくぅ…ッ」

いく。
イク。
イクレア。

イクレアは驚いて、莉麻の顔を凝視した。

この少女は、今。
何と、いった？
俺の…名を――――

少女は知らず知らずのうちに、イクレアに助けを求めた。

そしてこの後、そのまま意識を失った――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5958n/

散りゆく

2010年10月19日22時47分発行